

市町村名又は学校名	日野町立根雨小学校
研究主題	望ましい食習慣の定着をめざして、まなびを实践へとつなげる取組と評価 ～P D C Aサイクルに基づいた学校全体で取り組む食に関する指導～

1 地域の特色と学校等の概要

本町は山に囲まれた自然豊かなまちで学校や給食センターの周りには、田畑があり、四季を通じてさまざまな自然と触れ合うことができる。児童は、校地内の畑での野菜作り体験をはじめ、地元の高校生に教わりながらの稲作体験や地域の方の協力を得て椎茸の植菌体験など、食べ物の生産に関わる貴重な体験を行っている。学校給食では、日野川の清流で育った日野米を主食とし、地元の生産者の方が育ててくださった新鮮な野菜や地元で加工された味噌を取り入れるなど、旬が感じられる献立を提供している。

2 児童の実態

本校の給食残食率はここ数年1%以下と低く、苦手な食べ物でも食べることができる児童が多い。しかし、給食時間の様子を見てみると姿勢がくずれていたり、はしが正しく持てなかったりする児童の姿が目につく。教師が声かけをすると一時的に修正することはできるが、持続することはなかなか難しい。令和2年度の調査では、食事の正しい姿勢について、「できなかった」「あまりできなかった」と回答した児童が14%であった。

朝食については、時々食べない児童がいるもののほぼ全員が朝食を食べる習慣が定着している。しかし、食事内容について調査してみると、3つの食品群をそろえて食べることができていない児童が25%いることが分かった。バランスのとれた朝食をとることが大切であるという知識は持っていても、様々な要因から実践に結びつけることできない児童がいることも確かである。

3 主題設定の理由

望ましい食習慣を定着させるためには、知識から意識へ、意識から行動へとつなげていく必要がある。そのために、食に関する各種調査から明らかになった課題をもとに目標値を設定し、P D C Aサイクルに基づいた食に関する指導を学校全体で取り組むことで、目指す児童の育成につながるのではないかと考え、本主題を設定した。

4 めざす子供像

本校では、「ふるさとを愛し 心豊かにたくましく羽ばたく日野の子の育成」を学校教育目標に掲げ、凡事徹底を基盤とした教育活動を行っている。食に関する指導の目標については、「食事の姿勢、はしの使い方など正しい食事のマナーを身につけ、友達と気持ちよく食事をするができる」「栄養や食事のとり方などについて、正しい知識・情報に基づいて自ら判断することができる」「食事に興味・関心をもち、よりよい食習慣を形成しようとする態度を養う」の3項目としている。

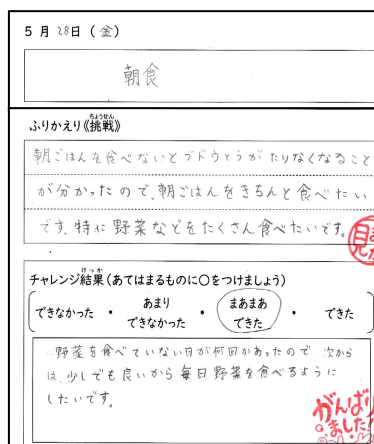
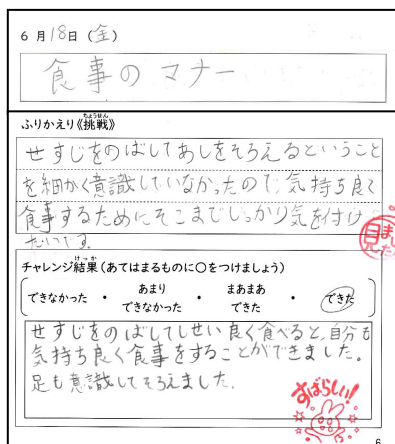
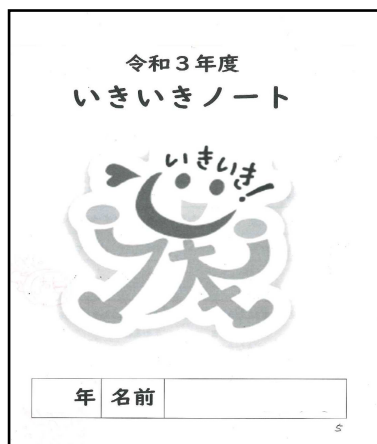
5 取組の実際

令和3年度は、重点的に取り組みたい3つの項目の目標値を食に関する指導の全体計画に示し、年度初めの職員会で教職員の共通理解をはかった。給食残食率については、偏食のある児童もいる実態から、心身の健康のために好き嫌いをなく食べることの大切さを伝えたいという観点で、現状値が維持できるよう目標値を設定した。

評価指標〈成果指標〉	現状値	目標値
正しい姿勢で食事をする児童	86%	90%
赤・黄・緑がそろった朝食を食べている児童	75%	80%
給食残食率	0.2%	0.5%以下

(1) 朝の活動 (いきいきタイム) を活用した取組

朝活動の10分間で、朝読書や音読、読み聞かせなどの活動を行っているが、各学年月に2回ずつ「いきいきタイム」を設け、養護教諭による保健指導と栄養教諭による食に関する指導を行っている。朝食や食事の姿勢、地産地消のよさについてなど、各学年に応じた指導内容としている。10分間と時間は短いですが、分かったことを実践につなげるために、最後は振り返りの時間を確保し、分かったことや、一週間がんばりたいことをノートに記入している。一週間後には、自分の行動を振り返り記録を残していく。いきいきノートに児童が記載した内容は、担任、養護教諭、栄養教諭が共有することで、連携を密にした指導につながった。



(2) 教科と連携した取組

5年生社会科では、日本の食料生産についての学習で町内の生産者から話を聞く機会があった。後日、栄養教諭からは給食の地産地消率についてや町内産の食材を多く使用するための工夫について話をした。児童は、生産者の方々の思いを知り、町内の産業への理解を深めるとともに、地場産物を活用した給食をより大切にいただくという思いや、家庭でも地産地消ができるように家族に呼びかけていこうという思いを持つことができた。



2年生学級活動では、「はし名人になろう」という題材で学習を行った。指導前のアンケートでは、正しいはしの持ち方ができると答えた児童が7名、だいたいできると答えた児童が2名であった。しかし、実際に正しいはしの持ち方を伝え、はしを持ってみると正しく持つことができる児童は約半数であった。正しいはし使いができるための練習法を伝え、一週間練習できるようチャレンジカードを配布し、事後の活動へとつなげた。

(3) 委員会活動と連携した取組

食事マナーについては、教師からの呼びかけだけでなく、元気づくり委員会の児童に問題を提起し、委員会児童と一緒に取り組んだ。委員会の活動としては、マナーアップ週間を設け、給食時の放送で呼びかけを行い、給食時間後には正しい姿勢で食べることができたかどうか調査を行った。マナーアップ週間終了後、各クラスの集計結果を全校に知らせ、食事マナーの啓発につなげた。

(4) 評価と考察

これらの取組の評価方法として、12月末に全児童を対象にアンケートを実施した。その結果、「正

しい姿勢で食事をしている」と答えた児童の割合は昨年度より少なくなり、69%という結果であった。そこで「できなかった」と回答した児童の学年別の状況を見てみると、約半数が1年生であったことから、学年を追うにつれて定着するよう計画していかななくてはならないと感じた。また、他の学年においても児童一人ずつ評価の基準が違いうことも明らかになった。そこで、教師の見取りで評価することも大切であり、そのためには教職員用の基準を作成しておく必要があるという課題も見えてきた。さらに学年の発達段階に合わせて、基準を設定することも有効であると考えられる。

朝食については、「赤・黄・緑がそろった朝食を食べることができた」と答えた児童が83%となり、目標値を上回ることができたが、朝の健康観察結果を見ると赤・黄・緑をそろえて食べることができない児童はほぼ固定化しており、個別に声かけをしながら、変化を見取っていく必要があると感じた。

残食率については、昨年度より若干増えたが毎月0.5%前後で推移している。偏食のある児童が食べるきっかけにつながる取組として、生産者との交流や地場産物を活用した給食の提供、健康な体づくりのための食に関する指導を今後も継続していきたい。

また、栄養教諭の指導内容について「該当学年の理解度に合った内容であったか」「児童の食の知識の充実につながったか」の問いに対し、全ての担任から「合っていた」「つながった」という回答が得られたが、今後も児童の実態を踏まえ担任と連携を取り合いながら進めていく必要があると感じた。

6 成果

・PDC Aサイクルに基づき、年度初めに計画を教職員で共有してから実践に移すことで、スムーズに取り組むことができた。教職員へのアンケート結果からも、全学級で取り組めたことが伺える。

評価項目 <活動指標>	している	概ねしている	あまりしていない	していない
日常的な給食指導（手洗い・配膳・食事マナーなど）を、継続的に実施していますか。	80%	20%	0%	0%
給食時間に日頃から、児童の食に関する知識の充実や興味関心につながるはたらきかけを行っていますか。	40%	40%	20%	0%

・今回のアンケートは児童、教職員共に Google フォームを使ったアンケートとした。集計に要する時間がかかり削減されるため負担感も少なく、業務改善にもつながった。

7 課題

- ・児童のアンケートに設定する項目は、定義しやすい内容、かつ、児童間で定義が変わらない内容になるようよく検討する必要がある。
- ・年度途中で全教職員で取組内容や目標値の確認、必要に応じて目標値等の変更を行うことでより児童の実態に即した取組となる。
- ・食に関する内容については、実践の場が家庭であることが多く、食習慣の定着に向けて家庭への啓発にも取り組む必要がある。

8 まとめ

今回の研究を機に、教職員のアンケートは町内全小中学校で実施した。本町は、令和5年度に小中一貫の義務教育学校になることからそれを見据え、今回研究した内容をもとに全体計画の見直しを行うとともに、評価指標や目標値の設定について検討していきたい。そして、ふるさとを愛し心豊かにたくましく羽ばたく日野の子の育成に向けて、PDC Aサイクルに基づいた食育を今後も推進していきたい。